

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32649

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12352

研究課題名（和文）郷愁を「翻訳」する：キューバ系移民作家の英語創作における相対化の分析

研究課題名（英文）Translating the Nostalgia: An Analysis of Relativization of Nostalgia in English-Language Writings by Cuban Immigrant Writers

研究代表者

山辺 弦（Yamabe, Gen）

東京経済大学・全学共通教育センター・准教授

研究者番号：00808032

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の出発点は、英語圏に移住し英語でも創作した三人のキューバ系移民作家の作品における「郷愁」の相対化のプロセスを、「翻訳」という概念を援用しながら分析することであった。新型コロナウイルスの流行による計画延長を経て、本研究は複数の学術論文の発表によって上記の目的を追求し、作品の意味を明らかにした他にも、文学理論書や文学作品の翻訳、文学作品集の編纂、口頭発表や一般書における解説など、複数の成果を生み出すに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スペイン語圏文学と英語圏文学の領域で個別に論じられがちな三人の作家を同じ概念を用いながら比較することは、従来の外国文学研究における単一言語・地域的なセクショナリズムの再考を促す学術的意義を有する。また、特に文学理論書や文学作品の翻訳、一般書における移民文学等の解説、作品集の編纂や口頭発表などの成果には、本研究の問題意識を様々な形で織り込みつつ、より広い読者に向けて提起するという社会的意義があった。

研究成果の概要（英文）：The main point of this study was to use the concept of “translation” to analyze the process of relativization of “nostalgia” in the works of three Cuban immigrant writers who moved to English-speaking countries and wrote also in English. Being extended due to the COVID-19 pandemic, this study pursued the above-mentioned objectives through the publication of several academic papers which clarified the meaning of the works, while it also produced several other achievements, such as the translations of literary theory book and of literary works, the compilation of a literary anthology, oral presentations, and commentaries in general books.

研究分野：人文学

キーワード：人文学 キューバ文学 ラテンアメリカ文学 移民 翻訳 バイリンガリズム 世界文学 亡命

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

従来の外国語文学研究は、ある地域や語圏の特殊性を深く理解する「単一言語・単一地域文学」的視点と、超域的な広がり重視する「比較文学」的視点という二つの極に引き裂かれてきた。スペイン語圏ラテンアメリカ文学研究もまた、「スペイン語」「ラテンアメリカ」に分析対象を限定する従来型の「単一言語・単一地域文学」的枠組みが、一方では、国を越えた人々の移動や、ある地域内での言語的・文化的多様化を捉え切れない、という問題を抱えてきた。中でも、大量かつ長期間にわたってラテンアメリカ人の移民先となってきた英語圏における越境と多様化は、新たな分析の枠組みを必要としていると思われる。

こうした問題意識を踏まえる時、申請者が専門領域とするキューバ系作家の作品は、格好の材料を提供してくれる。その理由は、革命以降歴史的にも稀有な長期共産主義政権を維持したキューバからは、数世代にわたる英語圏への亡命者や移民の系譜が生まれ、英語でも作品を発表する作家たちが継続的に現れている、という特殊性にある。それゆえに他の地域に比して、スペイン語圏と英語圏のあいだの地理的・言語的・文化的越境のありかたを、段階的な変遷を追いながら比較検討するための素材に富んでいるのだ。しかし、実際には前述した研究領域の分断のために、このような比較分析は不十分な状態にあると言わざるを得なかった。

2. 研究の目的

以上のような背景から、本研究では、キューバ系でありながら英語圏に移住/英語圏で出生し、英語でも創作した三人の移民作家、すなわち、すでに作家活動を開始した後でロンドンに亡命した移民第一世代であるギジェルモ・カブレラ・インファンテ、幼少期にマイアミに移住した「一・五世代」移民であるロベルト・G・フェルナンデス、そして第二世代としてニューヨークに生まれたオスカル・イフェロスと比較分析した。三者はそれぞれ、「英語で書く唯一のラテンアメリカ作家」/「英語に偽装したスペイン語」/「英語に翻訳されたスペイン語」と評される作風を有し、またともに移民経験がもたらす「郷愁」の表出ならびにその相対化を中心主題としているという点で、スペイン語文学と英語文学の境界上に位置する特異な作家である。本研究では、三者の比較研究を実現するために、「郷愁」を相対化し、複数の国家・言語・文化の混在関係を表現するものとしての「翻訳」という分析概念を援用して用いた。このことにより、従来は「スペイン語文学」(カブレラ・インファンテ)と「英語圏文学」(フェルナンデス、イフェロス)に分断されてきた三者を比較しその共通性と差異を明らかにすること、従来の外国語文学研究における単一言語/地域的なセクショナリズムに疑義を投げかけることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

上記の目的を達する方法として、まず主題面においては、以下の二点を明らかにする方法を採った。すなわち、自らのルーツでありつつ時空間的に隔てられた土地・言語・文化に対する「郷愁」を作品中のテーマとしている点、そして、その「郷愁」を批判的に相対化する小説的方法として、しばしば文学・音楽・映画・マスカルチャーといった各種メディアを介在させながら、様々な形で広義の「翻訳」を取り入れている点、である。

これら主題面での分析を進めるため、手法面での方法として実施したのは以下の諸点である。すなわち、比較の軸となる「翻訳」や「郷愁」といった概念を、翻訳理論や移民文学研究などを参照することで精緻化し、本論の分析装置とする方法。各作家の人生や創作過程の総体を有機的に理解するため、小説作品の分析のみならず、エッセイや伝記、草稿や書簡、聞き取り資料といった伝記的資料をも分析対象として活用する方法。これらに加え、英語圏に移住したキューバ作家のみならず、他地域や他言語圏に属する他の作家をも参照と分析の対象とする世界文学的な手法も、とりわけ新型コロナウイルスの世界的流行による研究計画の延長後には大いに採用することができた。

4. 研究成果

以下に、期間内の研究成果について記述する。

(1) まず、研究の基礎となる「翻訳」や「郷愁」に関する理論化については、翻訳理論や移民文学関連書籍を参照・分析し、それらの理解に基づいて本研究の理論的枠組みを構築する成果を得た。また外部にむけては、こうした理論分析の結果として、世界的に著名な翻訳理論の書であるエミリー・アプター『翻訳地帯』(慶應義塾大学出版会、2018)の共訳出版や、これに関わる合評会(津田塾大学言語文化研究所、2019)など、本研究の理論的理解を固めるとともに、広く識者に議論を開くような成果も生み出すことができた。

(2)本論の主眼となる三者の作品分析についても、一部を具体的な成果として公表することができた。2021年に東京経済大学紀要『人文自然科学論集』上にて発表した学術論文「『はざま』からの声:カルベール・カセイ、ギジェルモ・カブレラ・インファンテ、ロベルト・G・フェルナンデスの英語創作に関する一考察」は、カブレラ・インファンテの『煙に巻かれて』とフェルナンデスの『後ろ向きの雨』という英語作品の比較分析を、著名な第一世代亡命作家カルベール・カセイの作品を補助線に加えることで実現させたものである。この論文中で本研究に照らして最も大きな議論は、移民としての語り手の「郷愁」を相対化するために、『煙に巻かれて』においては過去の自作や作家としての自己像に対する「自己戯画化」、『後ろ向きの雨』においては「郷愁」への世代間の差異を際立たせる「視点の複数化」という語りの戦略が、広義の「翻訳」行為として採用されているという論点、そしてそれらの「翻訳」が、古今東西の映画・文学・音楽、もしくはマイアミのマスカルチャーといった文化メディアの介在によって加速されている、という論点であった。

また、三者のうちで最も高名で比較研究の軸であり、かつ近年再評価の機運が高まっているカブレラ・インファンテに関しては、さらに対象作品を広げつつ研究を進展させた。このことはとりわけ、カブレラ・インファンテのライフワークとして死後出版され、「郷愁の翻訳」という論点を最も先鋭化させている重要な作品『気まぐれニンフ』について、二つの成果を生み出すことになった。

一点目は当該作の全訳(水声社、2019)であり、本研究で得られた知見を訳文や解説に反映させつつ世に問うとともに、翻ってその翻訳・読解作業自体が、本研究の理解にも進展をもたらす成果となった。こうして得られた考察は、申請者が編者の一人となって出版した国際共著論文集『Finisterre II: Revisiting the Last Place on Earth. Migrations in Spanish and Latin American Culture and Literature』(2024)の中で、申請者自身の論文「Born (Mis)translated: Dimensiones of Translation in *La ninfa inconstante* by Guillermo Cabrera Infante」として発表された。この論文で主に論じられたのは、『煙に巻かれて』でも見られた語り手の「自己戯画化」という「翻訳」が本作ではさらに進展を遂げているという点、すなわち、音楽や映画などの文化メディアを介在させつつ二人の主人公の相互理解が失敗し続けていく小説の筋立てや人物造型に始まり、過去の語り手と亡命後の語り手の視点が複雑に重なり合う語りの構造、さらには読者による受容のレベルに至るまで、作品全体が郷愁を「翻訳」する行為とその可能性/不可能性を表象するものとして読み得る、という点であった。

なお、イフエロスの作品については、2018年にコロンビア大学における希少資料の調査なども実施しながら研究を進めてきた。その中で、例えばフェルナンデスについて論じた、マスカルチャーの媒介による「郷愁」の「翻訳」と、世代間の相違を顕わにする「視点の複数化」といった共通項、カブレラ・インファンテに見られたような「自己戯画化」との共通項を見出すことができたものの、研究期間内での具体的な成果発表には至らなかった。この点に関しては今後の課題としたい。

(3)冒頭に述べた通り本研究の目的は、文学研究における単一言語・単一地域的な枠組みと超域的な枠組みの融和を図ることであり、その意味で本研究が三人のキューバ作家をケーススタディーとして分析する「亡命者/移民」による「郷愁」の「翻訳」に関する分析は、応用としてより広い地域や言語圏の文学作品と比較され、「世界文学」の枠組みの中で考察されるべき広がりを用意している。したがって、本研究ではこうした世界文学的な視座を得るための文献調査や作品分析をも並行して実施していたが、特に新型コロナウイルス流行による研究期間の延長後には、つとめてこうした方針に基づき、さらなる論の発展を模索した。

広範で超域的な作品調査の過程は、本研究の基本的土台となっただけではなく、広範な読者に向けての「世界文学」紹介を通じた問題提起にもつながった。その例が、申請者が編者・訳者となった『世界文学アンソロジー』(三省堂、2019)や『世界の文学、文学の世界』(松籟社、2020)などであり、特に前者においては「移民」に関するコラムの執筆を通して、本研究で得た考察の一部を展開することができた。

こうして全世界的に広げた視座を、ふたたび(キューバに限らず)スペイン語圏の亡命・移民文学に再適用して考えることによって、具体的な複数の成果が、主に二つの領域において得られた。その一つ目の領域とは、アルゼンチンおよびメキシコなど現代スペイン語圏ラテンアメリカ小説を、本研究にて展開した「亡命/移民(ディアスポラ)」「郷愁」「翻訳」といった概念との関連において比較したものが挙げられる。「世界文学会」での口頭発表(2021)を経て雑誌『世界文学』への論文投稿(2022)に結実したこの論においては、アルゼンチン作家トマス・エロイ・マルティネス『煉獄』およびメキシコ作家エミリアーノ・モンヘ『荒廃の土地』が、ともにダンテの『神曲』という文化メディアを引用しつつ換骨奪胎し、その読み替え/書き替えを「翻訳」として作中に取り込むことで、亡命やディアスポラ状況から生じる現実認識あるいは「郷愁」をも「翻訳」し、別種の時空間を創出していることを提示した。

また、上に述べたうち二つ目の領域とは、メキシコ作家ファン・ピジョーロ『証人』に関する研究である。この小説は、欧州への移民となった主人公の祖国への「郷愁」の相対化が、メキシコ国民詩人の古典的作品の読み替え＝「翻訳」を通じてなされるという、本研究核心のテーマに深く関連する重要な参照文献である。この作品の読解と分析は、本研究の議論の射程をさらに広げるため大いに寄与するものであり、外部的な成果としては2021年の駐日メキシコ大使館

主催の文化イベントにおける口頭発表や、申請者による全訳（水声社、2023）の出版にも結実することとなった。

（4）本研究で得られた知見は、本研究と関わりの深いキューバ作家についての、より広範な読者にリーチアウトするような成果にも反映されている。例えば、『ラテンアメリカ文化事典』（丸善出版、2020）では、カブレラ・インファンテ、および亡命作家として同じく世界的に有名なレイナルド・アレナスについての項目を執筆し、二人にとっての亡命・移民の意味や、特にカブレラ・インファンテにおける英語創作の意味についても、本研究に基づきながら考察をおこなった。

上記の研究成果を総評すると、本研究はパンデミックの流行という未曾有の事態により研究計画の変更を迫られこそしたものの、そのことによってより広範な資料の収集と分析が可能になり、当初計画していたキューバ作家のみに留まらない作家たちの作品を含む形での分析や、理論分野での研究の深化と成果発表、世界文学的な視座を含む形での論旨の展開、共同編集や国際プロジェクト、翻訳や一般向け書籍を含む発表媒体ならびに読者層の多様化など、新たな発展をも得ることができた。このことは、そもそもの研究の目的に、「従来の外国文学研究における単一言語・単一地域的なセクショナリズムに疑義を呈する」ことを掲げていた本研究にとっては、予想以上の望ましい発展だったと評価し得るものである。そのそれぞれにおいて、本研究が独自に展開した「亡命／移民」「郷愁」「翻訳」といった概念を敷衍できたことには一定のインパクトがあったと想定されるが、その一方で今後は、本研究の議論がさらに多くの地域や時代の作品に対しても示唆を与え得るような進展を期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山辺 弦	4. 巻 135
2. 論文標題 現代ラテンアメリカ小説におけるダンテの「書き換え」 『煉獄』と『荒廃の土地』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山辺 弦	4. 巻 148
2. 論文標題 「はざま」からの声 カルベール・カセイ、ギジェルモ・カブレラ・インファンテ、ロベルト・G・フェルナンデスの英語創作に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文自然科学論集	6. 最初と最後の頁 71-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山辺 弦	4. 巻 1
2. 論文標題 Born (Mis)translated: Dimensiones of Translation in La ninfa inconstante by Guillermo Cabrera Infante	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Finisterre II: Revisiting the Last Place on Earth. Migrations in Spanish and Latin American Culture and Literature	6. 最初と最後の頁 153-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31244/9783830998433	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山辺 弦
2. 発表標題 現代ラテンアメリカにおけるダンテ受容と「書き替え」 Lost (and Found) in (Mis)Translation
3. 学会等名 世界文学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 ギジェルモ・カブレラ・インファンテ、山辺弦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 353
3. 書名 気まぐれニンフ	

1. 著者名 秋草俊一郎・戸塚学・奥彩子・福田美雪・山辺弦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 361
3. 書名 世界文学アンソロジー いまからはじめる	

1. 著者名 エミリー・アプター、秋草 俊一郎、今井 亮一、坪野 圭介、山辺 弦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 420
3. 書名 翻訳地帯 新しい人文学の批評パラダイムにむけて	

1. 著者名 Maria B. Clark, Wladimir Chavez, Myriam Teresita Merchan Barros, Michael Handelsman, Leonor Taiano, Keisuke Tsubono, Patricia Varas, Gen Yamabe, Eiji Yasuhara	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Waxmann	5. 総ページ数 200
3. 書名 Finisterre II: Revisiting the Last Place on Earth. Migrations in Spanish and Latin American Culture and Literature	

1. 著者名 ファン・ビジョーロ、山辺弦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 594
3. 書名 証人	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------